

第Ⅳ部門

テキストマイニングによるリビングラボ共創カフェ評価

関西大学環境都市工学部 学生員 ○綿世 壮希

関西大学環境都市工学部 正会員 北詰 恵一

1. 背景と目的に

多様な市民ニーズに対応した政策実行が求められる自治体では、同様に多様な顧客ニーズを反映したイノベーションが求められる企業活動でのオープンイノベーション(Chesbrough 2003)を援用して、産官学民が政策立案の上流から関与しつつ実施していくことが求められている。その中でも特に近年注目されている手法として、リビングラボ(European Network of Living Labs 2016)という手法があり、成功事例も数多く創出している。しかし、そこで主に行われるワークショップは、各グループが独自のノウハウで行っているケースが多く、価値創造の観点から具体的に評価できるモデルが必要となる。そこで、本研究では、ワークショップの発言内容に焦点を当て、リビングラボを効果的に進めるための重要要素を整理し、ワークショップの特徴付けを行う視点を抽出して、それに基づき評価することを目的とする。

2. 評価モデルの構築

筆者らは、「関西大学リビングラボ」を立ち上げており、その初期段階の課題のプロジェクト化のステップである「共創カフェ」における4回のワークショップを研究対象とする。各ワークショップはオンラインで実施され、初めに講師の話題提供があり、その内容に関する質疑応答や意見交換が行われた。

ワークショップの議事録をテキストデータとして計量的に分析するため、社会調査の学術研究で広く使われている KH Coder(制作者:立命館大学,樋口耕一准教授)をツールとして用いた。評価項目は、共創カフェの主旨から次の5項目とし、4段階の評価基準を設定し、レーダーチャートを作成した。

- ① 共創目標に向かって議論が進んだか
- ② 参加者の理解度
- ③ 課題解決性
- ④ 新たな価値創造性
- ⑤ プロジェクト可能性

各評価基準は、次に示す通りである。

- ① 共創目標に向かって議論が進んだか：各ワークショップのテーマに最も近い「テーマコード」が議論の中心にあったかどうか

表1 評価項目1の評価点基準

1点	テーマコードを中心に議論が行われなかった
2点	テーマコードを中心的に議論されたが、他のコードとの共起が5未満だった
3点	テーマコードを中心的に議論されたが、他のコードとの共起が5以上10未満だった
4点	テーマコードを中心的に議論されたが、他のコードとの共起が10以上だった

- ② 参加者の理解度：参加者の理解度が高い文末表現を1ptとした時、その点数の多さ

表2 評価項目2の評価点基準

1点	点数が100pt未満
2点	点数が100pt以上150pt未満
3点	点数が150pt以上200pt未満
4点	点数が200pt以上

- ③ 課題解決性：課題に関する議論を受け、その課題を解決に導く議論が行われたか

表3 評価項目3の評価点基準

1点	課題に関する議論を受け、その課題を解決に導く議論が行われなかった
2点	課題に関する議論を受け、その課題を解決に導く議論が1回しか行われなかった
3点	課題に関する議論を受け、その課題を解決に導く議論が2回行われた
4点	課題に関する議論を受け、その課題を解決に導く議論が3回以上行われた

- ④ 新たな価値創造性：価値創造性キーワードが、前半に出現すれば1pt、後半mに出現すれば2pt。

表4 評価項目4の評価点基準

1点	点数が50pt未満
2点	点数が50pt以上100pt未満
3点	点数が100pt以上150pt未満
4点	点数が150pt以上

- ⑤ プロジェクト可能性：プロジェクト可能性というキーワードの出現について、前半の出現を1pt、後半の出現を2ptとした時、その点数の多さ

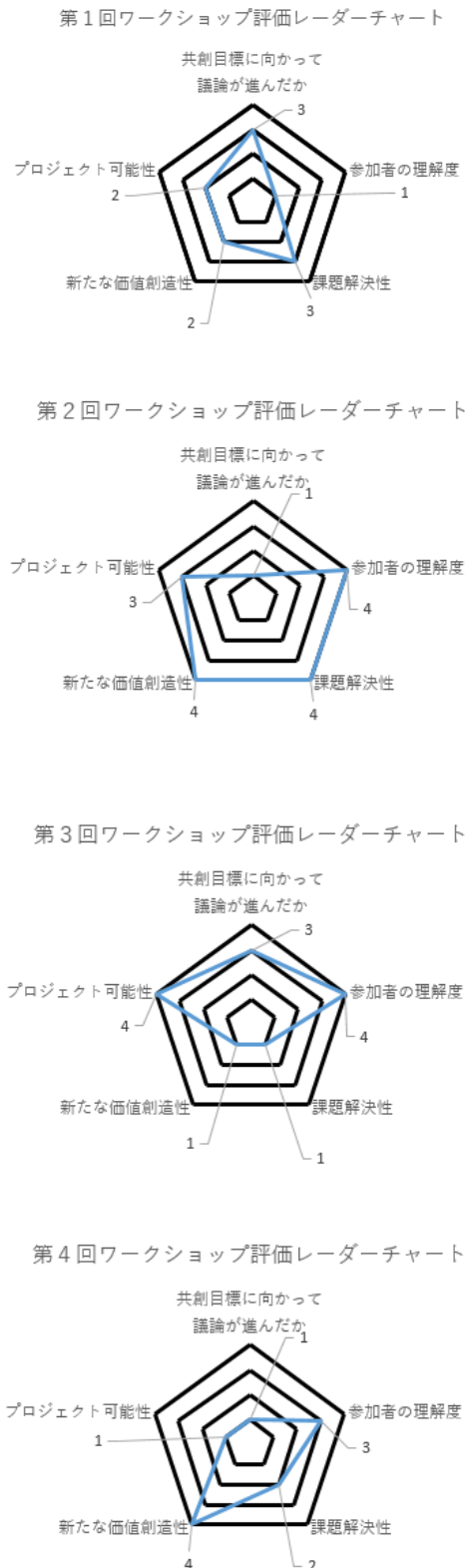
表5 評価項目5の評価点基準

1点	点数が30pt未満
2点	点数が30pt以上50pt未満
3点	点数が50pt以上100pt未満
4点	点数が100pt以上

3. 共創カフェにおける評価

図1に示すように、各ワークショップでレーダーチャートを作成した。①共起ネットワークの作成→②コーディング・ルールの設定→③クロス集計によるバブルプロットの作成の手順で分析を行った。

図1 各ワークショップの評価レーダーチャート



第1回ワークショップでは、4名の講師の話題提供があったため、参加者は、個々の内容は理解したものの、全体像を把握しきれないまま議論が進行してしまったと考えられる。また、質疑応答の時間も比較的少なかったため、価値創造性やプロジェクトが生まれづらい状況であった。

第2回ワークショップでは、講師が幅広い知識で質疑応答が進行したため、参加者の理解や課題解決、価値創造が生まれやすい状況であった。一方、幅広い分野の質疑応答が行われたことでワークショップテーマに関する議論が比較的少なくなった。

第3回ワークショップでは、講師がプロジェクト化に積極的に取り組んだ経験を持っていたため、新たなプロジェクトが生まれるきっかけになったといえる。一方、質疑応答を終え、参加者が理解を示したことによる新たな課題も生じた。

第4回ワークショップでは、講師が市民と一緒にあった取り組みを行っていたことで、新たな価値が生まれたきっかけになったといえる。

4. おわりに

ワークショップの特徴付けを行う視点を抽出して、それに基づく評価はできたと考える。しかし、分析手法や評価基準、評価点において、適用実績を繰り返しながら、継続的な改善を加え、より客観的な評価を行うことのできるものにしていく必要がある。

なお、本研究は、(独)環境再生保全機構の環境研究総合推進費(JPMEERF20191005)により実施したものの一部である。ここに記して謝意を表したい。

参考文献

- 1) 山田仁：今、オープンイノベーションが必要となる背景と課題、政府の取組について、産学連携学 Vol.12, NO.2 pp.43-47, 2016.
- 2) 片田江由佳：持続可能な地域づくりに向けた市民起点の共創活動「リビングラボ」の導入に関する考察ー福岡地域戦略推進協議会による取組事例をケースにー、福岡地域戦略推進協議会マネージャー、都市政策研究 22, pp.41-50, 2021.
- 4) 木村篤信, 赤坂文弥：社会課題解決に向けたリビングラボの効果と課題、社会課題解決のための Co-Production 5 巻 3 号, pp.4-11, 2018.